

地域現場での論文作成

☆推薦文☆

遠藤先生は論文を書きたいという一心で、僻地勤務でも諦めずに、論文作成を開始するためCRSTの門を叩き、実現されました。疾患の希少性だけではacceptに至らない症例でしたが、地域での放射線診断についての考察に共感し、世の中に送り出すために支援しました。記載内容を共に試行錯誤しながら修正し、1年半かけてのacceptとなりました。遠隔指導ながら、諦めず根気強く取り組んでくれたと思います。遠藤先生にはこの第一歩を基に、これから新たな知見をコツコツと世界に発信できる医師になってほしいと思います。

自治医科大学附属病院 地域医療学センター総合診療部門：石川由紀子、松村正巳

雲南市立病院内科 遠藤健史(島根 32 期卒)

医師8年目に論文を書く！と決めた私は、Clinical Research Support TEAM in JMU(CRST)にご支援いただき「単純CTで上腸間膜動脈のCT値が高い事を放射線技師が指摘し救命できた一例」についてケースレポート¹⁾をpublishすることができました。その後も地域医療の現場で臨床研究を行っています。論文執筆前の私は

- 「論文検索しても、どうせ文献を見つけられない」・・・Pubmed、こわい
- 「読んだ論文が正しいのか分からない」・・・統計解析、こわい。
- 「論文書きたいけど、何も思いつかない」・・・自分の目は節穴？

と、論文関連の単語に恐怖感を感じていました。そんな私の論文執筆のきっかけは、憧れの先輩医師の「英文でケースレポート書いていないと臨床医と証明する方法がないですよ〜」というきつい一言と「きちんと論文書けている臨床医は10%にも満たないかもしれません」というモチベーションな言葉でした。その翌日から、人生初のケースレポート作成を始めました。記載方法もわからず闇雲にまとめたあげくCRSTの亀崎先生にメールで助けを求めました。すると同日のうちに7つの質問を返信いただき、それに答えた後に松村正巳先生、石川由紀子先生が指導してくださる事に決まり論文執筆が開始となりました。



～遠隔指導の受け方のコツ～

- ・「メールできちんと聞きまくれ」

最初のケースレポート作成当初は、記載内容の根拠文献が見つけれず「こんなに文献検索ばかりしていて臨床に役立つのだろうか...」と、孤独感を感じる事がありました。しかし追記した文章を指導者のお二人にメールすると、すぐにコメントをいただけ、時には代わりに文献を見つけてくださることに勇気付けられ執筆を続けていきました。最終的に、Web会議は1回のみで、あとは100回を超えるメールのやりとりでPublishに結びつける事ができました¹⁾。遠隔指導では、このように長期間に多数の情

報をやりとりするため、過去の議論をきちんと整理して指導者に簡潔に質問することが重要だと学びました。

～臨床研究の始め方のコツ～

- ・「悩まずに、誰かに導かれてしまおう」

医師9年目からは島根大学医学部の地域包括ケア教育研究センター（CoHRE）に所属し、臨床研究を開始しました。私は痛みや認知症のケア方法を学ぶことをライフワークとしており、「人々を幸せにしたい」という漠然とした思いを持っていました。そんな私に、同センター長の並河徹教授は「医師にしか扱えないパラメーターで考えよう」と諭し、痛みと認知症というキーワードが選定されました。そして3,000例の健診データ分析を行い、2ヶ月後に抄録提出しAsia WONCAで発表するという明確な目標をいただきました。CoHRE 矢野彰三先生、安部孝文先生の2名体制で指導していただき統計手法の指導と、本論作成の両面からご指導いただきました。大部分を牽引いただき、ともかく学会発表ができ、その内容をもとに論文のPublishもできました²⁾。

～論文を書いて良かったこと3つ～

- ① 一次文献が怖くなくなった
- ② 次の研究を思いつくようになった
- ③ 二次文献のありがたさが身にしみるようになった

論文作成とは、世界初の知見を提示することです。そのためには、Knownを知りUnknownとの境界をはっきりさせるための先行研究調べが必要です。Knownを調べるために一次文献を多数読むこととなりますが、その過程で新たな研究アイデアが思い浮かびます。その結果、私は「薬剤性意識障害のケースレポート」、「救急搬送患者に関する解析」、「痛みと歩行分析」など、より自分の興味関心に近い研究が進められるようになりました。とはいえ、一次文献を検索・読むことは非常に手間がかかり、多数の文献照会をすでに行ってくれているUpToDate®に深い感謝の気持ちが湧いてくるようになりました。

～文献検索の方法；初学者向け～

「広く review から入れ」

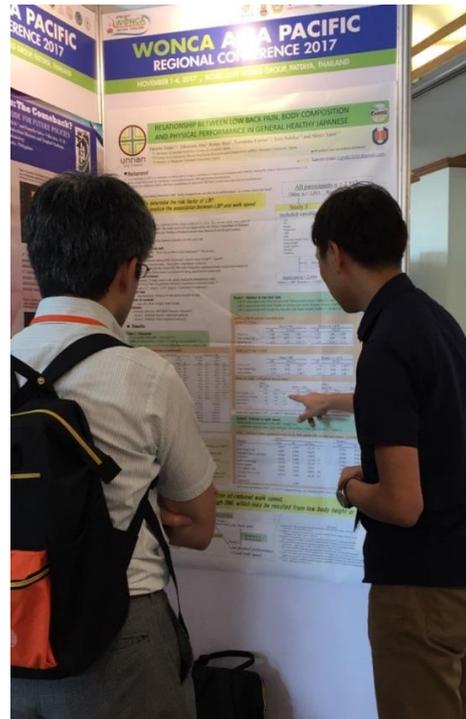
「その文献、自分の欲しい情報？：Introductionがヒント」

私が主に行う文献検索の手順は、①目的の分野の、なるべく新しいreviewを探す、②その文献のintroductionと結論を理解する、③自分の関心に近い部分の孫引き文献を読むという流れで行います。これで一気に目的の領域の全体像が把握できます。医師9年目にしてやっと気づいたのが、Introductionが面白いことです。「今まで〇〇と言われてきたが、今日では●●と言われている」という記載がその分野の背景を学ぶのに役立ちます。次に孫引き文献や自分で発見した文献を読むときは、その文献が科学的に正しいかという批判的吟味より、自分が求めている内容と合致するかどうかの方が何よりも重要です。ここでもIntroductionの「今まで〇〇と言われていたが、私たちは●●を明らかにするために研究した」、という記述がヒントとなります。

次に文献を批判的に見ないといけない、という凝り固まった考えでいましたが、まずは「レベルの高い雑誌」で「引用文献数が多い」ものなら信頼してよい、と安直に考えて読むようにしています。それでも、その文献が信頼できないと判断しときは無理せず指導教官にご意見をもらっています。

医師 11 年目の現在、思っていたよりも論文作成する友人が増えており、そうした活動も励みになっています。自分が学術活動をスタートさせていなければ焦りを感じていたと思います。みなさんも、CRST や身近な大学病院などで師匠を見つけ、論文作成をしてみませんか!?

1. Endo T, Ishikawa Y, Matsumura M. Diagnostic contribution by the radiographer: A case of superior mesenteric artery dissection in a rural hospital. 自治医科大学紀要 2019;41:41-5.
2. Endo T, Abe T, Akai K, et al. Height loss but not body composition is related to low back pain in community-dwelling elderly: Shimane CoHRE study. BMC Musculoskelet Disord 2019;20:207.



「認知症者のふれあい方」についてのワークショップ

ASIA WONCA 2017 で英語での発表に挑戦

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ★ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ★ 自薦・他薦を問いません
- ★ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7477 / FAX 0285-44-3625 / e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>